

選考委員決定!

蓮實重彦

創刊120周年記念企画

早稲田文学
新人賞
募集開始

2011年6月末日
応募〆切



前代未聞。誰よりも小説を愛し、誰よりも小説を鮮やかに裏切り語ってみせる文芸批評界の巨神、いま最初で最後たりうる新人小説を求む——ここで書かねば、いつ書くというのか。

■募集要項 (第24回)

- 募集対象 小説(未発表のもの)。もとより「小説」の定義はいまなお曖昧に放置されていますが、世界化されたその曖昧さとう向かいあうかが問われることになるでしょう。
- 応募枚数 四百字換算で原稿用紙百枚程度を上限とします。勿論、これより少なくてもいっこうに構いません。
- 応募資格 国籍、年齢、性別を問いません。
- 受賞作 選考委員選出によって一点を決定。
- 発表 二〇一一年度下半期発行の「早稲田文学」本誌を予定。
- 本賞 賞状 ほか副賞として十万円と、選考委員の著作を授与。勿論、本賞、副賞の受け取りを拒む権利は受賞者に所属します。
- (より広く作品を募るため、〆切・発表が「早稲田文学3」告知のものから延長されています。どうぞ奮ってご応募ください)

■応募方法

- タイトル・筆名・本名・住所・連絡先電話番号・メールアドレス(メールを使わない場合は不要)・職業・略歴を、別紙に明記して同封のこと。作品の一枚目に必ずタイトル(のみ)を記入。
- 原則 以下の書式に則ってご応募ください。A4用紙(横)に原則35字×30行で出力し、右上の角をホチキス、クリップ等で綴じること(作品の構成上必要な場合は、上記の字数行数以外でも構いません)。表紙または末尾に四百字換算の枚数を附記してください。手書きの場合は、原稿用紙ほか任意の紙に筆記し、右上の角をホチキス・クリップ等で綴じてください。
- 封筒に「新人賞係あて」と朱書のうえ、左記宛先までお送りください。〒一六九〇〇五一 東京都新宿区西早稲田一―九―一二 小池第一ビル二〇三 早稲田文学編集室

●詳細は、早稲田文学編集室サイト www.hinokuni.net/wasedaun または今秋発売予定の「早稲田文学4」誌上の告知をご参照ください。

今どこ？

牧田真宥子

案を呑んだので、こちらも拒否できなかった。

テレビのニュース番組は今日もおそろしいしらせを満載して画面からあふれだす。街行く人を手当たり次第に刺し殺した人。完ぺきに不意打ちの大地震。どんなことも起こりうる世界にぞっとしながら、時間のとまったような静かなところに私はいる。今なんにも起こっていない世界で、私はただぞっとしつづけている。

無人の広場にいる自分の肌の上を、自分のものではない血がぬるく伝っていくような、感じがする。

およそ三カ月に一度私たちは交替で電話をかける。

「新しい小学校はどう？」「小麦みたいなやつとそうじゃないやつとで構成されてる」「当たり前じゃない」「校歌は面白いかな」「どんなの」渚はいきなり声を張り上げて披露してくれるが、私にはどこが可笑しいのか察知できない。「もう一回」「やめだ、やめやめ。歌詞と現実の風景のくいちがいが絶妙なわけさ」「どんな風景？」市外局番からするとE市？ N市かな。海見える？」「やめとけって。半端に知ってことは、そのぶん誤りをうむってことだ」

彼女が詳しい居場所を明かしてくれないのは最初の電話のときからだ。そうでなくても私たちの会話はブツブツと途切れがちだ。よく考えると他愛無いお喋りをして過ごすことがそれまであまりなかった。部屋でトランプの神経衰弱やオセロをしているときの私たちは、「小鳥でももう少し存在感がある」と家族にからかわれるほど押し黙っていたし、言葉を尽くすのは新しい遊びの設定を説明するときだけだった。電話の下手な二人は小学校を卒業した。中学にはそこはかとなく渚に似た人々もいたが、そのタイプが私に関わろうとしてくることはまずなかった。中学では、私に接近してくるのは私と似たひとばかりだ。すきっと孤立することもなく、相島という新しい友人と行動をともにした。相島はときどき「何も信じられない」と言う。私は「ふふ」と受け流した。「私も」と返事するほどには相島の実在を信じられなかった。

答えは返ってこないとわかっていても、いつも初めは「今どこ？」

と電話越しに訊いてみる。

「ここ」

と彼女はいつもの調子でぶっきらぼうに言う。それは彼女にしかわからない答えだ。

渚と同じクラスになったのは小学校四年のときだった。

「三村小麦って変な名前だよな。なんで小麦なんだ？」

隣の席の彼女に言われて私は少しうろたえた。それから「考えたこともない」と正直に言った。新学期の休み時間、教室はまだしっとりこないざわめきに溢れて奇妙に華やかだ。

「私、あんまり考えない人の方が好きだよ。放課後遊ぼう」

机に頬杖をついてこちらを向き、渚は真顔で誘った。

私は、目の前にあるものが本当にここにあるのだと信じる

のに手間取るようなタイプだった。渚と遊んでいても、彼女と遊んでいることを時々実感しきれなくなる。いやに察しいい彼女は相方のそういう傾向を見抜いているが、「いいよいいよ信じなくて。それより今度はゴム跳びだ」と自分の実

在の主張よりも断然二人の遊びを優先するタイプなので、気が楽だった。私たちは一年間もうれつに遊んだ。カードゲームに対する集中力。知らない道を走り回る持久力。ボールを投げ合うリズム。新しいルールをのみこむ早さ。ルールから

逸脱する間合い。そういうものが、一人の人間みたいにびたっと合致していた。全然疲れなかった。

渚から転校を告げられたのは五年生になる直前だった。

「ヤクショ勤めだった父がミンカンにテンショクして、しかもテンキンゾクになった」

私は悲しくて、悲しくてバリんと音を立てて割れていきそうだった。しかしその悲しみを、やはり心のどこかでは信じきれていなかった。彼女は彼女独自のやり方で自分の感情と勝負しているらしかった。その日彼女は行く先々で下駄箱やら掲示板やらにもたれかかっていた。悲しむまいと張りつめすぎて、目を回していたのかもしれない。私は自分と彼女をなだめるように呟いた。

「二度と会えないわけじゃないだし」

「そんなまだるっこしい希望を口にするやつがあるか。かえってストレスだ」

もたれていた鉄棒から華奢な背中を一瞬浮かせて、渚は怒鳴った。私は鉄の匂いを嗅いだ。どこか遠いところで旗がぱたぱたと鳴っていた。

「電話だけは、確実にできるじゃない」

と私が言うのと、

「いっそ一生会わないって決めちゃおう」

と彼女が言うのは同時だった。驚いたが、彼女が「いいよ。どっちかの意見だけ通すなんてフェアじゃないな」と私の

どんなに想像を絶することも起こりうる世界が現実だとして、私がいるのは一体どこなんだろう？ 淡すぎて、ありのままに見ることができない。見えているものは何もかも、私の頭の内側にだけあるような気がする。時々がまんならなほほど自分が窮屈だ。

「どうして生きなきゃいけないのかな」

弁当のコロッケをのろのろと口に運びながら相鳥は突拍子もない質問を繰り返す。食べるのが早い私はプラスチックの箸を仕舞いながら言う。

「考えたこともない」

相鳥が不服げにこちらを見、私は弁当包みの中着紐をぎゅっと絞る。こんなに窮屈な頭では、何かを考える気にはなれない。もう十四歳になってしまった。帰りはみぞれが降っていた。薄緑の傘を差し、あまりの寒さに意味もなく歩数を口ずさみながら帰宅した。私が坂の上のマンションの七〇三号室で暮らしていることを、渚は一方向的に知っている。

渚は電話に集中するのが苦手だ。途中で、は、と短く曇った音が受話器に届いて、私は「今なんで鼻で笑ったの」と尋ねた。

「ちがうちがう。眼鏡のレンズに息吐いただけ」

「眼鏡かけた渚なんて見たことないんだけど」

驚いて金属的な声が出た。渚が今度こそ鼻で笑った。電話はさりげなく一切の遠さをぬぐい取ってこちらとあちらをつなぐ。本当はもう失っているはずの渚との一体感を延長させる。私はずっと、受話器の向こう側に、記憶のなかの像をあてはめつつづけていたのだ。

急に思い描けなくなった友人との通話は落ち着かない。食器棚の暗いガラス戸に電話機ごと映っている私の姿もまた、渚からは正確に想像されえないだろう。四年間に二〇センチも背が伸びたり、定期的に下着に血がついたり、小枝然としていた足の輪郭が妙に充実したり、体は黙々と何かを遂行しつつづける。

彼女がどこにいいのかわからないこと、いや、彼女がどこかわからないところにいることに、私は初めてつよい印象を受けていた。受話器の向こうで気配が少し逸れ、

「罵だ！」

と渚は低く口走った。私は旋回する鳶を想像しまいとした。こちらとあちらの断絶を安易に補ってしまいたくないと、反射的に思ったのだ。渚を縁どる風景だけでなく渚の姿も消え、電話の向こう側には、場所だけがある。見えないのに、見えないからこそくっきりとある。

相鳥は三年になるとにわかには焦りを募らせた。進学に意味はあるのか。どの高校のどのコースを受験するのか。そんな一大事を自分が判断すべきではないなどと言う。それでいて勉強は欠かさない。挙句「どこも合格圏内」と面談で太鼓判を押され、頭を抱えていた。

「僕たちってつきあってるのかな」

ある夕方、奥行きのない声で相鳥が切り出した。廊下から見渡せる松の並木が薄い光を透かしていた。私は耳を疑い、とめそうになった歩みをかろうじてつなげながら言った。

「考えたこともない」

私にとって彼は、男でも女でもどちらでも構わない存在だったのだ。立ちどまった相鳥を通り越したとたん背後から手首を引っぱられた。動転した私は頑なに、不自然に背中を向けたままでいた。

「本当に考えたことない？ せめてお互いだけでも信じられるような関係ほしくない？」

大きいのにすぐ音が終わるような声で相鳥が言う。自分のせりふを信じきれないのかもしれない。手首を囲む力が濃くなったので振り返った。視界を私の姿だけでいっぱいにしてある相鳥の目は、私の想像を絶していたが、その彼もまたこちらの存在を半信半疑にとらえている。この二人ぐみには出口がない。なんだか悔しいような気持ちだった。乾いた長い彼の指を振りほどきしなに、私の口を衝いて出てきたことば

があった。

「いいよいいよ信じなくて」

相鳥の目鼻立ちは浮かび上がるように急にくっきりした。しまったと思った。彼が欲しがっていた答えは、本当はこれだったのかもしれない。かつて渚に言われたとき、自分がどれほど余分な力を抜くことができたか、よく覚えている。でも私がそれを口にする資格はない。自分のせりふを信じきれないのだから。

一人で校舎を出て、かなり遠回りの道をゆっくり漠然と走った。それでもいつしかマンションに着いていた。思うほど息が切れていない。もっと走らなければいけない気がした。熱くなったスニーカーを脱いで家に入り、立ったまま電話をかけた。

「渚？」

「何だ小麦か。こないだ喋ったばかりじゃなかったっけ？

番号でも変わったか？」

私は部屋を見渡した。私の視界が移動していく先々で、家具や日用品や窓の風景が、にせものめいていく。むかし読んだ絵本の、触れるものすべてを金に変えてしまう王様みたいだ。私がいる場所は、私がいるせいでいつも中途半端な場所になる。

「小麦？」

渚がため息まじりに私の名前を呼ぶ。私の目が徹底的に届かない、ただ生々しくあるだけの向こう側を、私は信じたかった。自分のいる場所はもうパスして。目を伏せて尋ねた。

「今どこ？」

「ここ」

と言った。いつも「足りない」と思い聞き流す返事なのに、ぎくくつとするほど確かな手ざわりがあった。二人分の息遣いと温度、二重の気配。彼女にとっての答えでしかないはずのものが、そのまま私にとっての答えでもあった。いま私ごと向こう側へ飛び移っているように。何かを思い出せそうなく、

澄んだ予感がした。

「おい！」

「……びっくりした、何よ」

「次どう考えたって小麥が喋る番だろ。今すぐいい待ったぞ」

私は慌てて受話器を持ちなおした。

「ごめんごめん。えーっと、何だっけ。そうそう渚の勧めで

くれた映画、面白かった」

本当は向こう側に深く耳を傾けていたい。映画の感想を述べる自分の声が邪魔で、ひとりだに早口になる。渚の声が割って入ったのはそのときだった。

「あなたの電話はどうしてこうも不自由たらしいのさ。聞いてると今がいつなのかわかんなくなってくるよ。小麥は、私と喋っているようにしてそうじゃない。電話とやりとりしている。相手が私である必要はない、そうだろう？ さよなら。金輪際、切る。」

濁った単純な切断音だけが耳の中に残った。とっさに私は、去っていく「ここ」を追いかけようかのように玄関へ逆戻りし、さめかけたスニーカーをつかかってドアを開けた。しんとした秋の風と入れ違いに外へ踏み出す。坂の上の一带にはこのマンション以外に高い建物がなく、七階の廊下からでも眺望はひらけている。

夜を透かす広大な青空の裾には、冴えたオレンジ色がまだ厚みをもって街を囲っていた。ビルやマンションのまっすぐな窓の列と不規則な灯り。住宅街を整然と区切るアスファルト。屋根の高低で見え隠れするヘッドライトの透명한黄色。街灯に照らされた部分だけ真昼以上にあざやかな植物。極彩色のネオンを放つパチンコ店の、音は全く聞こえない。小さなロータリーにとむ車。改札から流れ出てくる人々が、駅前を通りすぎる人々へゆるやかにまじって見分けがつかなくなる。彼らの、おびただしい数の行き先。遠い遠い橋の上ですれちがう電車。川の対岸に広がる田園地帯はもうよく見えない。黒々と形だけ残した山の向こうにはまた同じような街並みが続いている。

「ここ」はどこにも去っていかない。私から彼女までのあいだは空いてなどおらず、あらゆるものの風景、あらゆる人の場面で埋まっている。電話回線だけが綱渡りの綱みたいになり渡されているわけじゃない。

渚。思い出した。あなたが答える「ここ」は、私こそがずっと口にしたかった言葉だった。どんなことも起こりうるこの世界と、自分の体が属しているこの世界。同じなのに重ねきれなくて、宙吊りの場所——無人の広場みたいな場所で、私の心はピントも合わないままそうとつづけていた。自分のいるところと自分の中とがばらばらで、「ここ」という感覚できちっとつなげられなかった。

今は、自分が位置としてむきだしになっているのがわかる。私だけの方角をもち、私だけの速度を帯びて、この場を私の形にしている。この地点からあなたの地点まで、同じようにあらゆる人の「ここ」が、切れ目なくつらなっている。頭の内側に張りついているようだった景色が目の前に展開している。渚、そうつとしながらでも私は、むきだしのここから見える全部を、はつきりと見ていたい。

電話ではなく直接、彼女にそう言いたかった。相当おこらせたから鼻先でドアを閉められるかもしれないけれど、私は彼女を探し出そうと思う。やっと伝えたいことができた。行く道の途中で相島にも伝えるつもりだ。すっとんきょうな人だからくっついてきかねないが、それならそれでいい。風が少し汗ばんだ肌にひやりと密着しては消えていく。ブランコを前へこぎ出した瞬間みたいに、ビルも住宅も歩行者もふいに近く、大きく見える。夜空さえ露わな感じがする。

牧田真有子 Mokita Mayuko

80年生。デビュー作「椅子」(『文學界』07年12月号)から一貫して、どんなことでも起こりうる世界と偶然(ここにいる自分に戸惑う人物を描き、近作「予言残像」(『群像』10年6月号)ではさらに広がりを見せる。本作の小麥と渚の描き、ちょっとボンヤリした主人公とエキセントリックなパートナーの凸凹コンビが魅力。ほかの作品に、「湖水浴」(『文學界』09年7月号)、「夏草無言電話」(『群像』09年5月号)。

講談社◆話題の文芸書

これぞ哲学の魅力。
カントの「わからなさ」がわかる!

『純粋理性批判』を 噛み砕く

殺人級に難解な「アンチノミー論」を徹底解説。
「わからなさ」の代名詞、
カントの思索に体当たりする
“実践”哲学の書!

中島義道

講談社 〒112-8001 東京都文京区首羽2-12-21

定価2,415円(税込) ISBN978-4-06-216363-7

重たいカーテンの下ろされた教室は、暗がりに包まれていた。全開にした窓からぬるい風が吹きこみ、厚いカーテンの裾が波打つ時だけ光が差す。机に立てた「あしながおじさん」にちらちらと差しかかる白を辿って窓辺を見れば、燦々と降る夏の陽射しを受け止める二枚のカーテンの真中に、小さく赤が滲んでいる。目を細めてようやく、それが誰かの髪どめだと気づく。

「せつ先生！ トイレに行ってもいいですか！」

唐突に上がった大声に、誰かが思わず、ぱっ、と濁らしたのが聞こえた。ぱか、と言いきりになったのだ。気持ちはよくわかる。半ば果れて教室を窺うと、クラス中から寄せられる視線になど気づかぬ美袋先生は、一人涼しげに文字の海を泳いでいる。閉じた世界の薄い膜越しに、ページをめくる音が幽かに聞こえる。視線が教室を行き交い、暫しして、教室の端でせんせい、という声が空気を震わせた。抑えた声は四方からぼつぼつ差しのべられ、不揃いな層になる。せんせい、せんせい、美袋せんせい。声は不思議なリズムに載せられて前へ前へと運ばれていく。だが、音の波は一番前の席にさしかかったところでふつんと途絶えた。誰もが最後を引きとるだろうと思った学級委員の背中が、堤防となって拒んだからだった。再び目交ぜが教室を横切りはじめた時、七夏が腕を伸ばし、どうして今まで誰もそうしてやらなかったのだらうと思うくらい鮮やかに、後ろの引き戸を示した。懸命に廊下を駆けていく足音に、そこかしこでくすぐすと花が咲く。花畑の上に満ちたため息が注がれ、皆が教室を見る。本を閉じた美袋先生は、空いた席を見て首を傾げた。七夏が教壇に足を載せ、そっと手を口の横に当てた。美袋先生はこそばゆそうに額を見て教室を見渡した。やがて空いた席が埋まると花も散り、教室は本の海に呑みこまれた。風が吹かれて離れてしまいそうなカーテンを、イチゴ色の髪どめが繋いでいる。

立てた本の影に甘え、机に頬をつけて目を閉じた。

nanakikae

本好きがこうして手製本やブックカバーまで自作してしまいう「文学少女」。ブログ日記「花露堂日録」(<http://hanagasumido.hp2.jp/>)が人気を博し、「彷彿月刊」で連載を持ちつつ、風呂敷に教科書や本を包んで学校や図書館通い。永遠の愛読書は『崖の窟』(佐々木丸美)、『自負と偏見』(オースティン)。



「義弘、あんたまだそんなの読んでたの」

夢は、ため息まじりの声に破られた。顔を上げて時計を見れば、もう放課後で、帰りの会も終わっている。七夏だって昔読んでた。衝立にしていた本を閉じて呟けば、七夏は笑ってカーテンから髪どめを外し、転校生の机に置く。そして一人だけ真新しい制服を着た芹生が礼を言い終えないうちに教室を出ていった。汗がむず痒く頬を伝う。小さな拳が顎からすべり落ちた時、静かな声が制服のシャツに滲んだ。

あんなふうになんか言わないのにな

いや別にばかにされたわけじゃあなくて。芹生は一度、静かにこちらを見た。ことが喉のところでつかえて濁る。細い指が机の隅、七夏が置いた髪どめに触れようとして、逡巡する。……私、帰る。

え。机の上に置き去りにされた髪どめを掴んで腰を浮かせると、引き戸の細い隙間にスカートの裾がひらめいた。一步踏み出そうとした瞬間、世界は柔らかに閉じられる。思わず握りしめた掌に髪どめが食い込んだ。苛立ちがこみ上げて床の木目を辿ると、芹生が軽く収めた椅子の下に、何か光るものが落ちていた。膝をついて伸ばした指先に、ぬるい感触。椅子を押しやれば、濃い影から抜け出した床に、細々としたものが散らばっていた。薄紙に挟まれた切手、銀色の金具。一枚だけ切り離された切符は茶色い染みに汚れ、触れると砂っぽい。ひとつひとつ手触りの違うその中に、一冊の本が佇んでいる。赤と生成りの紙を交互に綴じたもので、袋状になったページから木の鉤が飛び出している。手にとれば、苦みの強い甘さが薫った。綴られているのは国を渡り歩く旅人の話らしい。どうりで遠い匂いがする。夏の熱にさらされた本は人肌のように温い。ふと、掌の上で本の輪郭が震えて歪んだ。眩いほどに鮮やかな赤がとろけ、文字は渦巻く色彩に呑みこまれて淀み、親指を越え手の甲を伝い落ちてゆく。粘り気のある赤が制服を濡らし足の間をなぞる。握ったままの髪どめが、ぱちんと音をたてて開いた。もし、今これを身につけたら、きつと死んでしまいたくなるだろう。鏡に映った自分の顔を見て、恥ずかしいと思わずにはいられないからだ。もし旅にでるのなら。女子も男子もない、ただ優しい鏡の国へ行きたかった。赤い上靴。翻るスカート。イチゴ色の髪どめ。手に入らないものすべてを巻きこんだ赤が床に広がる。髪どめを握りしめた拳を額へ押し当てる。金属の安い匂いが、教室に満ちた夏の噓せかえるような気配に沁みだした。

旧作異聞

21



『紀ノ川』(新潮文庫)



斎藤美奈子
Saito Minko

56年生。94年、『婦人小説』で評論活動を始める。古典とベストセラー、時事問題をからマンガ・アニメまで、題材の硬軟を問わず舌鋒鋭く論じる著者には、読者の物の見方をひっくり返す「目からウロコ」が満載。『ふたたび』、『時事ネタ』など。

和歌山県を代表する作家といえ、もちろん中上健次だが、もうひとり忘れてはいけない作家がいる。有吉佐和子である。

とりわけ作者二八歳の作品『紀ノ川』(一九五九年)は、紀の川流域(作品名は「紀ノ川」)だけで、現在、行政上の河川名は「紀の川」)の紀北地方を舞台にした堂々たる「サ・コ当地文学」だ。ありがちな手口とはいえ、三代の人生と紀の川の流れが重なるわ、要所要所で川の美しさが強調されるわ、この地域にとってはまことに誇らしい作品といっいいい。

物語は一八九九(明治三二)年、主人公の真谷(旧姓は紀本)花の婚礼の日からはじまる。〈見、紀ノ川の色かいの〉青磁色の播らめきが、拜堂を出て東の石段へ戻りかけた二人の眼の前に横たわっていた。美つついのし。花は思わず口に出して感嘆した。

花は紀の川中流域、九度山村(現九度山町)の旧家の娘である。花とその祖母が立っているのは慈尊院。高野山が女人禁制だった時代、女性が参詣できるのは「女人高野」の別名がある、この寺までだった。花はここから紀の川を舟で下り、下流の六十谷村(現和歌山市)に嫁ぐのだ。

彼女が格下の真谷家の長男と結婚したのは「紀ノ川沿いの嫁入りは、流れに逆ろうてはならんやえ」という祖母の一言による。女学校で「女大学」を叩き込まれた花は女の役目は子を産み育てることだと信じていた。そして実際、良妻賢母の鑑のような賢夫人となり、五人の子を育てる一方、夫をもり立て、夫の敬策は県会議長から代議士にまで出世する。

ところが、娘の文緒は、母が保守本流の紀の川なら、自分は支流の鳴滝川だ、みたいなのをいう跳ね返りのワガママ娘。東京女子大を出て銀行員と結婚すると、夫の赴任先の海外にさっさと出ていく。

しかし、文緒の娘の華子はまた本流に戻ってきた。海外育ちながら、花が守ってきた伝統文化をそれなりに敬愛する華子は、祖母に連れられて国宝・和歌山城の大手守から紀の川を見る。〈ようごらんな、華ちゃん。あれが紀ノ川やして〉「まあ、川が、あんな色をしてる。綺麗ねえ」

戦争が激化して、そんな和歌山城も空襲で焼け落ちた。物語のラストは一九五八(昭和三十三年)、二七歳になった華子が再建され

たばかりの和歌山城から河口を眺めるシーンである。彼女が立っているのは鉄筋コンクリート製の大手守。十円玉を入れる望遠鏡から目を離した華子は〈花洋として謎ありげな海——波が陽光を弄ぶのか、見る間に色の様々を変えて見せる海を、いつまでも眺めていた〉。ここで小説は終わる。

中流の慈尊院ではじまり、川が海へとそそぐ光景で終わる。慈尊院はいまや世界遺産にも登録されている古刹だし、和歌山城は和歌山市観光の目玉である。しかも『紀ノ川』は作者の母方の一族がモデル(華子のモデルは作者自身)。格好の観光資源でございましょう?

ところが、『紀ノ川』が(または有吉佐和子が)、尾道における林芙美子のように当地で歓迎されている気配は、なぜかあまり感じられないのである。慈尊院にはテキストの一部分を引用した「小説『紀の川』有吉佐和子著より」と題された看板が立っていたけど(でも作品名の表記は間違っている)、手書きの簡素な看板はかえって物悲しい。わずかな縁しかなくても当地文学に飛びつく地域も多いのに、この冷遇ぶりは何?

理由はいろいろ考えられる。高野山はじめ紀北には有名観光地が多いので文学ごときに頼る必要がない。逆にこのへんは東京に対する埼玉や千葉にも似た大阪のベッドタウンなので、観光開発や地域振興の意識に乏しい。その前に自治体に金がない。あるいは生前の有吉佐和子を覚えている人がまだ多いため、生々しすぎて観光資源化しにくい。

ま、以上は憶測なので、ほんとのところはわかりません。が、この一件から推察できるのは、こ当地文学といえども地域が飛びつく作品(作家)とそうでない作品(作家)があるらしいということである。

これは中央文壇での評価とも関係がある気がしてならない。中上健次もけっして観光資源化しやすすい作家とはいえないが、新宮市観光協会のHPには「中上健次と熊野大学」というページが設けられている。一方、生前の有吉佐和子はベストセラー作家だったが、現在も正当な評価が与えられているとはいえない。作品(作家)が地域に片思いしている、たぶん全国的にも稀な例。一九八四年に彼女が急死してからすでに二六年。せめて和歌山市民くらいはもうちょっと愛してやれよ、と思わずにはいられない。☹

金原瑞人選
オールタイム・ベストYA
好評刊3冊!

とむらう女

ロレッタ・エルスワース/代田亜香子訳

ママをくたしたあんなに家族の世話をしやうと泣きながら泣いてた。19世紀死んだ人を埋める準備をするおとむらう女だ。19世紀半ばの大原地方を舞台に、母の死の悲しみを乗り越え、死者をやる仕事の大変な意味を見いだして、少女の姿を、まやかに描く感動の物語。



*1680円

希望のいる町

ジョーン・パウアー/中田香訳

あんなにハの名を知りずママを幼いあんなをおぼさんと預けて出て行きました。でもあんなは、自分の名前をホアに変えて、人生の流に立ちむかう。ウェストレスをしながら高校に通う少女が、名コクのおぼさんと一緒に小さな町で長遠で正義感に燃えて大活躍。



*1890円

私は売られてきた

パトリシア・マコーミック/代田亜香子訳



*1785円

《全米図書賞最終候補作》
《グスタフ・ハイネマン平和賞受賞》
貧困ゆえに、わずかな金で親に売られた13歳の少女、衝撃的な事実を描きながら、深い叙情性をたたえた感動の書。

作品社 TEL03(3262)9753 FAX03(3262)9757

フリーペーパーなんだから、
街へ出てゲットしろ、
もしくは郵送で送ってもらえ、
俺の文章はデータじゃねえよ。
(※編集部注…モブ・ノリオ氏の「Free」より引用)
……という著者の意向により、「絶対兵役拒否宣言」は紙版でのみ掲載しております。

世界をちょっとでもよくしたい

～早大生たちのボランティア物語～

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター (WAVOC) 兵藤智佳・岩井雪乃・西尾雄志 著
定価 1,000 円 (税込) ISBN : 978-4-657-10213-3 C0036 早稲田大学出版部

Waseda Bungaku Free Paper

WB vol.20

2010年7月31日発行 (年4回刊)

Published by 大日方純夫

Edited by 芳川泰久 (Editor in Chief)

横山絢音 青山南
福井咲貴 江中直紀
関口拓也 貝澤哉
近藤景亮 十重田裕一
三田誠広
山本浩司

窪木竜也 市川真人
朴文順 (Concept & Direction)

Design 奥定泰之
Photo 松藤浩之^{pl6} Michi^{pl}
Special thanks to 青木誠也 都丸尚史
山崎貴之 和野潤
編集・発行 早稲田文学会 / 早稲田文学編集室
169-0051 東京都新宿区西早稲田 1-9-12
小池第一ビル 203
TEL/FAX 03-3200-7960
http://www.bungaku.net/wasebun/

印刷 凸版印刷株式会社
116-8531 東京都文京区水道 1-3-3
TEL 03-5840-4845 FAX 03-5840-1676
http://www.toppa.co.jp/

▼「こどもWB」もこんないで丸1年、次号からリニューアル予定です。
今号の玉川氏による新連載を筆頭に、より多様なコンテンツをお届け
できるよう画策中。ひとまず終了をお願いした連載陣のみなさん、あ
りがとうございました。読者のみなさん、秋をお楽しみに! (K)
▼ネットワークと電子環境の時代に「書くこと」「読むこと」はどう
変わるか、どう変わらないか、そうしてどう「変わらぬために変わる」
か、「変わるなかで変わらないものを固める」か。ここ5年(つまり
隔月刊の雑誌形式を休止し、「WB」を立ち上げたりや不定期刊の本誌

第十次を再開した期間)、ずっとそのことについて考えてきたし、い
まもろん考えている。長年の友人であるモブ・ノリオ氏の主張は理
解し尊重し、作品はいつだって環境とは無関係に屹立す
ることができたそうするべきだが、「届く」かどうかはそれと常に
等価ではない(村上隆氏の旧作や言葉にはなお響くものもあるが、そ
の彼がほとんど独自のなまでにiPad 販売を早々に選んだ事柄は、恐
らくもその無関係性を象徴しているだろう)。「メディア」と「読む側」
がどちらも変数的に浮動し(だからこそ私たちは他者をラベル
づけしてカテゴリー化するをしまい。それは過去あらゆる「自称・
正しき者」が陥ってきた罠だ)、テキストそのものの書かれ方すらも
変わりつつある時代、「早稲田文学」は生じうるあらゆる可能性を注
視し想定しつつ(その思いひとつに編集室Kがネットで見つけてくれ
た「カーリル」があって、そのとき直観した未来や、洛西・吉本両氏
たちによって話すうち生まれる連携のアイデアは、この数年ごとくこ
までも膨らんでゆく。乞ご期待)。今とこの先の「文学」を考えてゆく。
▼その根底にはむろん揺るがぬテキストや言葉と対峙する単独者があり、
彼ら彼女たちが言葉と折り結ぶ姿への信頼と畏敬がある。長くは
述べまい。川上未映子氏の「地獄」を読み、蓮實重彦氏のもとに言葉
を届けること。いま私があらゆる読者に求めるのはその一点だ。(lc)
▼「WB」第1期の表紙写真や、今回の川上氏の表紙写真を撮影した
現代美術家・松藤浩之氏の個展が、9/15から行われます。題して「松
藤浩之展「KAGE」- MATSUKAGE Exhibition 「Shadow of Light」。
会場は Mizuma Art Gallery (新宿区市谷田町 3-13 神楽ビル 2F)。詳細
はミヅマアートギャラリーのサイト (http://mizuma-art.co.jp) にて。

これから、俺たち、
どうすりゃいいんだ。
そうだ、ベルクへ行こう

コーヒー ¥210 生ビール ¥315

Beer & Cafe
BERG
☎03-3226-1288
http://www.berg.jp

↑ベルク通信、全バックナンバー
がご覧になれます。

JR 新宿駅東口改札出てすぐ
(ルミネエストB1)

POP⁴ リノベーション

池田理代子
『ベルサイユのばら』
全5巻（集英社文庫）

POP リノベーション第4回は、SHIBUYA TSUTAYA 7階のコミック担当の林香里さんが案内してくれました。林さんのオススメは、池田理代子『ベルサイユのばら』。言わずと知れた、男装の麗人オスカルとその幼なじみアンドレが、革命の動乱に巻き込まれながら清冽に生きる姿を描く名作マンガです。

「『ベルばら』を知らないひとはいないはず。ただ定番だからこそ、原作コミックを読んだことがないひとは多いと思うんです」。言われてみれば、“懐かしのアニメ”としてくり返し放映されたオスカル最期の場面は知っているけれど、途中の話は覚束ない。マリー・アントワネットを筆頭に、きらびやかな宮殿で、浮世離れた眉目秀麗な貴族たちの悲恋を描く——最初に発表されてから約30年、タイトルとともに広く知れ渡る、そんなイメージから敬遠しがちなひともいるでしょう。「でも、実際に読んでみると、抱いているイメージが変わります！ じつはこの作品、オスカルとアンドレだけの物語ではないのです。悪女と思われがちなマリー・アントワネットの可愛らしさと気高さに注目してください。彼女の行く末を知ってはいても、自分の行いを正してほしい、と願わずにはいられません」と熱っぽく語ってくれた林さん。

打ち合わせを終えて、今回のデザインは、ポップアップカードのお城に決定！ 林さんの言葉にあるような、『ベルばら』を読む前にもっていたイメージと読んで変わったイメージ、その2つをデザインに活かそう、とは奥定さんの発案です。

カードを開くと飛び出すお城の面には、大書きされたタイトルと短いコピー。それを読み進めると、お城の裏側へと誘導されます。すると、正面からは隠れて見えなかったもう一つのコピーが。しかも、バラを思わせる赤を背景に。そこに、意外と知られていない『ベルばら』の読みどころが書かれているのです！

この記事が届くころには、SHIBUYA TSUTAYA に設置予定。設計図とともに、早稲田文学ウェブサイト（www.bungaku.net/wasebun/）でも公開します。お楽しみに！

(SHIBUYA TSUTAYA：東京都渋谷区宇田川町 21-6 TEL:03-5459-2000)



※背景写真はイメージです。

Final Dragon Library World 4

ファイナルドラゴンライブラリー

🍷 ぼくは勇者に向いてない『六番目の小夜子』編

体を起こそうとすると、そこには灰色しかない。たらしと冷たいものが頭から垂れる。体を動かすことができない。

そうか。ひとつごとのように思い出す。闘技場に巨大な牛男とちいさな少年がいる。少年は呆然としている。なぜ、こんな場所に自分がいるのかまったく把握できていない。牛男が剣を振り下ろす。激痛が走る。少年はぼくだ。

そして灰色の世界にいる。

実は世界が灰色の布で仕切られていたのだとでもいうようにぐにやりと曲がり、起伏をつくる。もぐりこんでいた少女がカーテンを押しながら前進したときのように、灰色が少女の形にふくらむ。

そうだ、おまえだ。すべての元凶はおまえだ。

「君は、だれ？」

「わたしはユミ」

「ユミ？」

普通の少女の名であることに驚く。ユミ？

「どうして、ぼくをこんなところに？」

「わたしが連れてきたわけじゃないわ」

「おまえが、ぼくの手をつかんで黒い穴に」

「違う。あなたが落ちようとしたから、わたしは……」

少女は、また、いつものように本を一冊、差し出す。

「なんで、ぼくは本を読まなければならないんだ!？」

ぼくの手には本。『六番目の小夜子』というタイトル。

少女は、灰色に消える。

で、やっぱり少女の手渡す本を読みはじめる。しかも、少し楽しみになってきているのだ。こんな酷い目にあわされているのに。

最初の十ページあたりで夢中になる。ふと頭によぎる。現実逃避？ こんな馬鹿馬鹿しい現実に見舞われているうえに、さらに現実逃避？ わからない。とにかくぼくは本の世界に入り込んでしまう。

サヨコは、学校に伝わる裏行事だ。“在校生が卒業生に花束を渡す時に、あるメッセージが次の『サヨコ』となるべき者に手渡されるといふ。それを受けとった『サヨコ』は、『サヨコ』になることを承知したという証紙に、四月

米光一成 Yonemitsu Kazunari

64年生。名作落ちゲー「ぶよぶよ」はじめ多数のゲームをつくるほか、小説をゲーム化しようとする『日本文学ふいんき語り』や、『仕事を100倍楽しくするプロジェクト攻略本』等、ゲームという視点から幅広い活動を見せる。
<http://blog.lv99.com/>

ナカシマカズユキ Nakashima Kazuyuki

67年生。作品によりまったく異なるテイストに描き分けるイラストレーター。以下のURLにはムチムチプリプリしたキャラクターたちが勢ぞろい。
<http://www.nk-w.jp/>

の始業式の朝、自分の教室に赤い花を活けなければならない。赤い花が活けられた瞬間から、その年のゲームはスタートするのだ。”

その六番目の年。転入生がやってくる。名は沙世子。物語は、謎をはらみ展開していく。謎だらけだと言ってもいい。謎の転入生。六番目のサヨコは誰なのか？ サヨコ伝説の全貌は？ 首謀者は？ 学園祭で行われる全員参加の奇妙な劇？ その台本は誰が書いたのか？ もうひとりのサヨコは？

読み終わって、ぼくは「これはマンガだ!」と強烈に思った。お姉ちゃんが貸してくれた『吉祥天女』というマンガとシンクロするようなシーンもあった。親の親の世代がマンガと言うときは蔑視のための言葉だが、ぼくたちはもちろん絶賛の言葉として使う。強いベクトル。物語に引っ張られるように、ぼくは世界に入り込んで読む。キャラクターの気持ちと重なる。章が終わっても、次のシーンを知りたくて、また虚構の世界に潜り込む。

ふは——と潜水していた世界から抜け出ると、解けた魔法の余韻がまだ残ってる。

読み終わると、世界は色を取り戻し、ぼくは部屋にいる。自分の部屋ではない。ベッドに腰かけている。ひとつの世界を読み終わった充実感でぼくはぼーっとしていた。

耳元で少女の悲鳴が響くまでは!



To be continued.

第03回 『かのこちゃんどマドレーヌ夫人』のすずちゃん げきからぶんがくにゆうもん 望月旬々もん

Mochizuki Shunjun

68年生。主として国内外の小説・演劇について「朝日新聞」「ボンズン」等で望月旬々義の書評を手がける。著書に『日本文学にみる純愛百選 zero degree of 110 love sentences』（共著）。超がつくほどの辛い物好きで、職場にはカレー部があるとのウワサも。

今から約100年も前のことなだけで、フランスの作家のマルセル・ブルーストさんが『失われた時を求めて』という大長篇小説を書いたってということ、もしまだ知らなかったらきみの頭の片隅に入れておいてほしい。お話の中味については、ちょっとここでは説明しきれないので、国語の先生とか図書館の司書さんに、次のようをお願いしてみてください。

「ブルーストを15秒で要約してもらえますか?」

それ、ちゃんと読んだことがある人でも100%無理なんだけど、笑って許してくれるユーモアの心得がある大人なら、少なくとも、“紅茶にひたしたマドレーヌ”のエピソードについては教えてくれるだろうから。

というわけで、今回の本は、万城目学さんによる『かのこちゃんとマドレーヌ夫人』。小学1年生の女の子たちの友情と「猫の恩返し」が語られる、ほのぼの&せつない味わいのファンタジー小説だ。

著者はこれまでに、京都や奈良や大阪を舞台に（卑弥呼にたどりつく土地の歴史をからめながら）爆笑ものの青春小説を書いてきているわけだけど、本書は、乳歯から永久歯へと歯が生え替わる年頃の“ぴかぴか”な子どもの感性を描いて、児童書の名作と呼ぶにふさわしい。

かのこちゃんは小学1年生の女の子。小学校入学ぎりぎりまで親指しゃぶりをしていたんだけど、ある日、その親指を飼猫にかまれて、〈知恵が啓かれた〉。それをきっかけに、親指という「栓」を口元から抜いた彼女は、まるで好奇心がからだのなかからあふれだすかのように、自分の身のまわりにあるいろいろな言葉について知りたがり屋さんになって、〈世界がグンと広くなる〉体験を楽しむようになる。

かのこちゃんは、「どこか変で、でも好きな響きの言葉」リストというものを作っていて、こんな言葉を、お気に入りとして登録しているみたい——“やおら”とか“とかく”とか“ほとほと”とか“たまさか”とか。

でもまだ、よく意味がわかっていなかったりもするから、

学校の「男子と女子、どっちが難しい言葉を知っているか」対決では、くやしい思いをしたりもする。“いかんせん”を知らない男子から、イカせんべいのことかよと言われても、ちゃんと説明できなかったり。

だから、晩ごはんの席でカレーを食べながら、お父さんに「いかんせん、を使って文を作ってみてください」っていうお願いをするんだけど、その回答が、ふるってる。というかしびれちゃうね、こんなふうに応えられたら——

「おとうさんは辛いカレーが好きなんだけど、いかんせん、今日はこの甘口のルーしかありません。そこで、お父さんはカレーに七味唐辛子をかけて、味を加えてみようと思います」ほんとと素敵なお父さんだけど、ここでは子役キャラとして（かのこちゃんの同級生の）すずちゃんを紹介しますね。

薄いけど幅のある眉&短い三つ編みヘアのすずちゃんは、自らの左右の鼻の穴に、両の親指を突っこみ、他の四本指をちょうちょうみたいに羽ばたかせる「鼻でふてふ」の名人。かのこちゃんとは茶柱ならぬ〈ウソコ柱〉も立つということを見せしめて、意気投合し、「刎頸の友」（とても仲のいい友達）になれたのに……小学1年生の夏休みあけに、父親の仕事の都合でインドに引っ越すことになった。

すずちゃんもかのこちゃんも、“変なもの”が大好き。

だからこそ、くっきりしたおとなの雰囲気にも人一倍あこがれるふたりが、『赤毛のアン』をまねてお茶会を開くシーンは記憶に残る。そこで食べた洋菓子のマドレーヌは、きっと、ふたりの思い出の味になるはず。

——とかなんとか言ってるあいだに、残念ながら、物語の鍵をにぎるマドレーヌ夫人とは何者かについて詳らかにするスペースがなくなってきてしまった。ジブリのアニメ作品にもありそうでない設定だから、「外国語」も巧みにあやつる夫人の正体は、実際に読んで驚いてほしいにやー。

あと、末筆ながら、かのこちゃんやすずちゃんにぼくからおすすめしたい変てこスイーツは「いちごキムチ」。きみも食べるチャンスがあれば、ぜひ！ 一期一会ということ。あ

早稲田大学大学院文学研究科 現代文芸コース 新設!

本気になれば二年で十分!!

書く・読む・編む「プロ」を目指す人のための、実践的修士プログラム誕生!

本コースは、第一線で活躍する小説家・批評家・翻訳家・研究者などによる修士課程として開かれる。

数々の実作者・編集者・ジャーナリストを輩出してきた旧第一・第二文学部の伝統に倣いながら、さらに実践的かつ領域横断的な知性と意欲の育成を通して、現代の文芸界に新鮮な生気を吹き込むこと。

その目標に向け、創作の技法と理論、翻訳技術、サブカルチャーも含む多様な対象に応じる批評的アクセスポイント、現代的編集法、内外の文学作品の創造的解読法、現代思想の応用法など、文芸界に勇躍するために不可欠な演習・講義を幅広く柔軟に用意すると同時に、本コースは、研究者の道を目指す人々の将来にも有益な指導と刺激を与える場でもある。

開設講座

- 現代文芸演習（修士論文指導）
- 創作技法研究・堀江敏幸 創作理論研究・渡部直己
- 翻訳技術研究・青山南 テキスト批評研究・小沼純一
- 現代文芸講義
- 現代文芸論・芳川泰久 小説表現論・東浩紀
- 翻訳表現論・松永美穂 先端批評理論・貝澤哉
- 文芸・ジャーナリズム論・十重田裕一 ほか

大学院入試要項 下記ウェブサイトにて公開中
出願期間 2010年8月20日(金)～8月27日(金)

お問い合わせ先 文芸・ジャーナリズム論系室 TEL: 03-5286-3560 文学研究科ウェブサイト <http://www.waseda.jp/bun/gs/>

陽気て利発な若者へおくる思想ガイド

私学的、あまりに私学的な

渡部直己

好評発売中

ひつじ書房 定価2,415円(税込)
ISBN: 978-4-89476-525-2

未来の読書と ランデブー

新城カズマ

Sinjow Kazuma

生年不詳。遺書を誤送して消えた少年を探そう高校生たちの最も危険な一日を描く『15×24』ははじめ多くの著作をもつ。この7月には、ショートショート集『マルジニアの妙案』と新書『われら銀河をググるべきや』を同時発売。ブログ：散歩男爵、twitter id: SinjowKazuma

終

第04回◎未来の物語は、今ここに

QNE-04-PP

某月某日、都内のファミレスにて――

新城「さて前回は読書のレイヤーとフィルタリングについてだったけど、今回は何について書こうかな……そういえば先日発売されたばかりのiPadを持ってきてたんだっけ。どれ、スイッチを入れてみよう」

T「あは〜ん、そんなとこ擦っちゃイヤですわん！」

新「わあ、なんだなんだ、そういうキャラ設定だなんて聞いてないぞ。もしかして君の名は『iPadたん？』」

T「ちょっと違いますわん。私の名前は『タブレットたん』でござりまする〜（魔法のボタンを振って、キラキラした粉をふりまく）」

新「ぶはっ、げほげほ。なんとなく読めてきたぞ今回の展開が……お嬢さん、あなたは未来のタブレット型端末の擬人化だね。しかもちょっと不思議ちゃん系の」

T「半分だけ御名答ですわん。でもそれだけではありませぬ〜。私め、いわゆるタブレットが提供するところの、未来の物語なのであるんですわん。うふふ」

新「未来の物語？ なるほど、やっぱり思ったとおりだ。これまでこの架空エッセイの連載で見てきたように、技術革新によって、図書館も書籍も公共性すらも変化する。当然、物語だって変わらざるを得ない。どんなふうになるんだい？ 僕はそこが知りたくて、これまでいろいろ調査したり実験したりしてきたんだ。それこそ、一昨年末にやった例の早稲田文学10時間シンポジウム以来、ずっとね」

T「承知しておりますわん。あの日、新城カズマなるお人は『紙か電子か』よりも『有料か無料か』がこれからとっても大事な論点になってくるはずだ、と言っておられましたわん」

新「最近はそのに加えて、『黒字で終わるか赤字で終わるか』という評価軸も考えてるけどね。つまり、プロ（＝商業）vsアマチュア（＝同人）という明確な区分が薄まって、プロもアマもパートタイムも黒字を出し続けられれば最終巻まで出る、赤字なら物語は途中で終わる。でも、そもそも物語が完結しなくちゃいけないなんて法律で決まってるわけじゃないさ。水滸伝なんか、語る人によってエンディングの箇所まで違うし。ともあれ、確かに僕も考えることはその頃から基本的に変わってない……書物はショモツになるだろう。となれば、読書もまたドクショになるだろう。それは電子化され、高速化するだろう。ネットの中をものすごい速度で感想が飛び交い、電子的な小銭も行き交い、あちこちで話題が炎上し、瞬間的な『今ここ』と長い長い『歴史』が溶け合っていく」

T「その結果、何が生まれるんですのん？」

新「うーん、僕もまだ抽象的にしか予測できてないんだけど。作者の特権性が弱まってゆく——というか弱めても上手くいくようなシステムを造ることはできる。と同時に、読者の匿名性も弱めることが可能になる。それは言い替えば、無名のままの消費者で居続けるという特権を弱める、ということにもなる。あらゆるレベルで、それまで当たり前の特権だと思われていたものが弱まってゆく。でも、そのぶん新たに面白いこと、エキサイティングなこと、幸せなことが生まれるから、失った特権は実はそれほどもったいないというわけでもない。……うーん、なかなか具体的に表現できないなあ。君ならできるのかな、タブレットたん？」

T「もちろんですわん！ 物語もまたその特権を弱めて、モノガタリになってゆく……もっと正確に言いますと、物語はモノガタリに戻ってゆくのであります〜！」

新「戻る？」

T「そうですね。長くて、ちゃんとした形のある、一塊の『語り』から……もっとぐにゃぐにゃで、適当で、でもそのぶん気楽な『お喋り』に。それは何度聞いても面白くて。それを創った人ではなく、その時にそれを上手くしゃべる人が尊敬される——」

新「おしゃべり？ 物語を語るのではなく……モノガタリをしゃべる？」

T「未来の私たちは、モノガタリではなくてオハナシと呼んでござります。そして、そんなオハナシたちはこの時代にも出現し始めてますですわん。ようっく注意してまわりを御覧になれば、きっとそれが見つかるはずですよ！ （と言いつつ、蝶々のような羽根をパタパタさせながら飛び去ってしまう）」

新「オハナシ……特権性のない、繰り返し可能な、作者よりも話者が優先されるおしゃべり？……待てよ……そうか、わかったぞ！」

担当編集「何がわかったんですか、新城さん」

新「わ、びっくりした。生で登場するのは初めてですね。どうしたんですか」

担「いや、実はお知らせがありまして。次回からの〈WB〉リニューアルに伴いまして、このエッセイも完全電子化が決定しました。ようするにウェブ連載ですね」

新「おお、それは凄い。これでメッチも少しはゆるく……」

担「なりません。金輪際なりません。というか、むしろ電子化作業の時間が必要なので、これまで以上に前倒しでよろしく。で、未来のモノガタリ/オハナシの形って、どんななんですか」

新「そうそう、それです。作者も読者も特権は弱まり、無限のバリエーションと感想が飛び交う中、ただオハナシをする話者のキャラと瞬間的スキルだけが重要になる。未来の物語の原型は、きっとこれですよ」

人志松本のすべらない話 [DVD]

担「えー……っ!? じゃあ、新城さんみたいな小説家はどうすればいいんですか。お笑い芸人みたいに話術を磨くんですか？」

新「いやいや、他にも方法はありますよ。すでに秘策も二つ三つ思いついてます。それについてはウェブ連載でお話ししましょう。ではまた〜」



『蛇衆』でデビューした新鋭 矢野隆

注目の第2弾



……今度は何の
不可思議だ？
止めておけ、
行くだけ無駄だ



行ってみなけりゃ
解んねえ。
考えるよりもまず
行動だつてえの

無頼

スリリングかつスピーディな
冒険時代小説登場。

最新刊
発売中

矢野隆

カバーイラスト／長田悠幸

江戸時代、正反対の性格の商人・蜘蛛助と
牢人・兵庫が、「不可思議」を求め旅へ。
一枚の絵巻を手に、巨大な鉄の門を
探して九州の山中奥深く分け入る……



▶ <http://www.shueisha.co.jp/burabura/>

◎矢野隆の本・好評既刊



〈第21回 小説すばる新人賞受賞作〉
室町末期、銭で戦を請け
負う傭兵集団が出現。
超絶アクション時代小説！
●定価1,575円

漫画化 YJC「蛇衆」①巻8月19日発売!
漫画／長田悠幸 原作／矢野隆 ●予価590円

集英社

●定価は税込みです。〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2-5-10

教えて！ 図書館だより 拡張版

「カーリルレシピ」 でウチのオススメ

text: Maeda Louis



あなたの「オススメ」

本を紹介してくれる司書さん・図書館員さん、大募集！「教えて！図書館だより」欄で書籍を紹介して下さる図書館関係者の方

ご応募いただける方は、氏名・住所・電話番号・メールアドレス・所属施設名を添えて、「」記載の奥付にある「早稲田文学編集室」まで、

「WB」前号でご紹介した、図書館横断検索サービス「カーリル (http://calil.jp/)」。全国どこでも、自分が登録した自宅や学校・職場の住所から、近くの図書館にその蔵書があるか、貸し出し中かどうか、などがわかるサービスだ。運営を行っているのは、20万以上のユーザー登録実績を持つシェアウェア「紙copi」などを開発した洛西一周さんを中心とする「Nota Inc.」。自由度の高い表現力が評価され、市民団体や小学校等で積極的に活用されているウェブ共有型マルチメディアボード「NOTA」など「だれでも参加できる創作型コミュニティ」を開発・運用している。前号で登場してもらった、(有)RY SYSTEMの吉本龍司さんもメンバーのひとりだ。

洛西さんたちは3月のサービス開始以降も、「カーリル」のシステムを拡張するアイデアを募集する「図書館APIコンテスト (http://www.hamakei.com/headline/5053/他)」や、「岐阜県中津川市立図書館でのiPadを用いた蔵書検索や電子書籍閲覧の実証実験 (http://current.ndl.go.jp/node/16232他)」、既存のOPAC (オンライン蔵書目録) との連携、そしてユーザーのオススメ本を有機的に紹介できる「カーリル・レシピ」など、次々と新機軸を打ち出している。彼らが「カーリル」で目指すものは何なのか——今号では、アメリカのシリコンバレーに在住ながら「カーリル」の開発・拡張のために一時帰国している洛西さんにインタビューした。

「図書館の司書さんの実力を表に出すことと、クリエイター支援を同時に考えています」と、洛西さんはクールに語る。「いろいろやりながら、進むところと進まないところがあるけれど、果敢にやってみて、と書いてください (笑)」——彼が言うのは、「レシピ」を軸とした「カーリル」のサービス全体

の展開についてだ。「本のコンシェルジュ」である司書さんは、聞けばオススメの本を教えてください、という自体を知っているひとが少ない。「こんなに知識があるんだ」という実力をアピールする手助けをしたいんです。そうやって作られたのが、「カーリル・レシピ」。だから、そこにはすでに司書たちが参加して、図書館の外に出て自分たちの推薦書について書いていって、「今日の図書館ピックアップ」として図書館の紹介も始まっている。

けれども図書館だけで本が読まれては作者たちが干上がってしまう……その懸念に対し、大学の学部時代に法学部、大学院で政策・メディア研究科に在籍してクリエイティブ・commonsについて検討してきた洛西さんは、自身の開発したソフトの課金経験も踏まえて次のように話した。

「紙copi」の場合、最初はフリーソフトだったんですが、開発には手間も時間もかかっているの、アンケートで調べた各自の利用頻度に応じてコストを負担してもらおうシステムをとってみたいんです。開発費前提じゃないから開発の自由度もすごく高くなる。いわゆるクリエイティブ・commonsの多くは、現状では無償コンテンツを流して別の場所で課金していますが、「おもしろかった? じゃあいくらね」みたいに、制作者とユーザーそれぞれの対話で価値が発生するカタチの経済圏が作れたらいいなど。本も同じで、いまだと「おもしろかったからもう一冊買って著者に倍払う」のは難しいけど、電子媒体なら後払いや追加支払いも可能になるし、そういうユーザーの好意や良心が生きるカタチがつけられるかもしれない」と言う。

事実、「カーリル」がやろうとしていることは単純に「図書館の本を手軽に検索できる」便利な無料サーバ、ということではまったくない。遠くない

将来に、ネット書店や出版社とは別の自律的なブック・ポータル=読書の入り口として機能し、ユーザー (読者) と著者、さらには図書館や書店、出版社など「本」と「読書」をめぐるゆるやかで大きな、誰もにとって魅力とメリットのある新しいつながりを産む日が訪れることが大きな夢としてある。それは彼らの夢だけでなく、私たちの夢でもあるはずだ。

そんなわけで今月の「ウチのオススメ」は特別編として、「紙のWBを離れて「カーリルレシピ」に書き込んでみよう」です。手順は簡単、「カーリルレシピ (http://calil.jp/recipe)」にアクセスし、右上の「レシピを作る」をクリック。Googleとyahoo! JAPANとmixiいずれかのアカウントを入力してログイン (アカウントを持っていないひとは、この機会につくってみよう)、プロフィールを設定・保存したら、あとは画面の指示に従ってオススメ本を3冊とそれぞれの説明100字以内、全体をつなぐテーマとそれについての解説文を入力するだけ。

その日から、あなたのレビューをもとに図書館や書店で本を探すひとが出てくるかも、です。



FUSOSHA BOOK

鋭敏の落語研究家が描く
名人ら12人の芸と師匠と落語世界

芸と噺と
——落語を考えるヒント
松本尚久著 ●定価1,890円(税込)

無比なる文士たちの信念と孤独
評論家・福田和也の真骨頂文芸論!

アイボッドの後で、
叙情詩を作ることは野蛮である。
福田和也著 ●定価1,890円(税込)

扶桑社新書
傑作アルバム誕生の秘密に迫る
ジャズ評論の新しい挑戦!

マイルズの夏、1969
中山康樹著 ●定価798円(税込)

超世代文芸クオリティマガジン エンタクシー バックナンバー ●書店でご注文いただけます。各号の内容等は、本誌、または扶桑社ホームページでご確認ください。

en-taxi
ODAIBA MOOK No.30 SUMMER 2010

エンタクシー 30号
A5判 定価860円(税込)
責任編集 坪内祐三 福田和也
好評発売中

加藤陽子 ×
佐藤優 × 福田和也
日米安保と沖繩の五十年

小池昌代 「悪事」
ECD「十年前の」
大鶴義丹
新連載 ホンマタカン
「その役、あて書き」その四
「きわめてふじうけい」
2010年の「中平卓馬」

杉田成道
「願わくは鳩のこゝろに」

わたしの1984
坪内祐三 木滑良久 高橋源郎 島田雅彦 石田千
嵐山光三郎 神足裕司 川村毅 中野翠 亀和田武

作家評伝
Mea Culpa — 我過り
小島信夫 / 田中小実昌 / 西東三鬼
結城昌治 / 中原中也 / 中谷孝雄

文庫版 特別付録
小島信夫
「私の作家評伝」

教えて！図書館だよ

日本はもちろん世界各地の図書館ではたらく人たちがイチオシの本を紹介！



『一夢庵風流記』
隆慶一郎
マンガの原作になった傑作時代小説



『【新釈】走れメロス 他四篇』
森見登美彦
感動の名作が、爆笑の迷作に！



『連射王』
川上稔
本気になれるならゲームも良い？



『河童が覗いたインド』
妹尾河童
きっとインドに行きたくなる？



『氷菓』
米澤穂信
「氷菓」というタイトルの意味は……？！

葛飾区立四つ木地区図書館・司書

米村俊さん

私の勤務する葛飾区立四つ木地区図書館は、蔵書数4万冊ほどの小さな図書館です。しかも場所がちょっと特殊で、小学校の一角を間借りしつつ、出入り口は別で運営しています。小学校の図書室とは別で、きちんと区立図書館。利用者は小学生も多いですが、主婦や高齢の方も多く、図書館の一角には「時代小説コーナー」なんてものがあります。本屋さんだと時代小説を別コーナーにしているところも多いのですが、図書館では一般的に管理の問題か、あまり分けたりしません。同じ作家さんの本が2箇所に分かれちゃったりもしますし。それでも、分けてみたら予想以上に好評で、うちの図書館が誇る人気コーナーです。

今回紹介する1冊目は、そんな時代小説コーナーから持ってきた隆慶一郎『一夢庵風流記』。天下の傾奇者としてその名を馳せた前田慶次郎利益の生き様を描いた時代小説。昔、「週刊少年ジャンプ」で連載していた『花の慶次』の原作で、戦国時代の武将・前田慶次が有名になったきっかけの本です。それほど知名度のある武将ではなかったのが、今やゲームなどで戦国最強の武将って感じに登場したりと、超がつくほどの有名武将。そのきっかけとなった時代小説の傑作、読んでみませんか？

2冊目は誰でも話ぐらいは知ってるであろう太宰治の『走れメロス』を『夜は短し歩けよ乙女』や『四畳半神話大系』で知られる森見登美彦が、個性的なキャラクターと独特の世界観で描き上げた異色作『【新釈】走れメロス 他四篇』です。

偏屈な男たちの異常な友情を、太宰治の『走れメロス』をなぞりつつ描いた表題作他『山月記』『藪の中』など、名作をオマージュしつつ、全て主人公を京都の学生にした面白おかしい短篇集。元の作品を知っている人はもちろんのこと、知らない人も楽しめて、元の作品に興味を持てる……かもしれない本です。

3冊目に紹介するのは、シューティングゲームを題材にした世にも珍しい小説、川上稔『連射王』です。何かのスポーツにのめりこんだ主人公が繰り広げる、熱い「スポ根小説」が数ある中、シューティングゲームに出会った主人公がそれにのめりこんで繰り広げる「ゲー根小説」とも呼べる作品。スポーツを頑張るのは格好いいのに、ゲームを頑張るのは格好悪い？ いやいや、そんなことはないんだって思わせてくれる、熱く格好いい青春小説です。シューティングゲームのコツなんかも書いてあるので、初心者の人なら読むだけでゲームが上手くなるかも？

活字ばかり続いたので、ちょっと趣向を変えて絵の多い本を。次に紹介するのは妹尾河童の『河童が覗いたインド』です。舞台美術家の妹尾河童がインドを覗き、大量の手書きイラストとともにインド各地での体験を書いた旅行記。1985年発行の本ですが、作者の視点と繊細なイラストからリアルなインドが浮かび上がる、インドを感じられる一冊。宿泊したホテルの部屋などの、家具や置物もふくめた俯瞰図(天井から眺めたイラスト)と解説コメントがたくさんあり、旅行を感じられ



中高生向けに年に一度作っている「Dog ears」は毎年25冊程オススメ本を紹介しています。

て面白いです。全編手書きなどとても楽しい本ですね。

最後に紹介するのは、数年前からずっと注目しているいち押し作家さんのデビュー作。米澤穂信『氷菓』です。何事にもやる気が無い省エネ主義の主人公は、姉の勧めで高校の古典部に入ることに。日常生活の中にあるふとした謎と、それを解明する過程を取り扱った「日常ミステリ」という推理小説のジャンルの作品で、やる気は無いけど洞察力と推理能力に優れる主人公が、個性溢れる古典部の仲間たちとさまざまな難問に挑みます。この作品は、私がヤングアダルトというジャンルを見つめなおすきっかけになった本なので、思い入れが深かったりします。学生向きとか考えないで、読みやすく(簡単という意味ではなく)面白い本を選ぶ。そんな基準で5冊選んでみました。

モーニング掲載中
草子ブックガイド
早稲田文学編
玉川重機

「草子ブックガイド」本篇で草子が読んで書いたけれど、これじゃ借りたしよ猫の友だち！

登場しなかったブックガイドを紹介しますよ

猫は人に可愛がられられる魔法を持つているそうです

特に女と子供にその魔法はかきやすいといふ

中公文庫
尾辻克彦著

尾辻克彦著
吾輩は猫の友だちである

「吾輩は猫の友だちである」

乙さんの妻と娘もやはり魔法にかかって黒猫のペリーを飼い始めます

主人ム乙さん 物吉キキ × イチ

妻 桃子 二番目の妻 桃から生まれた

娘 チチヤス トミ センク 持ち

母トヨ子(のちにクニヨシと改名)

猫が普段は見えない人と人との「距離」をあぶり出していきます

乙(おっ)さん一家

そんな事しても人に好かれ続ける超能力を持つて生まれた猫達が私にはうらやましい

猫の魔法にかかったかどうかは猫を見た時「可愛い」でなく「可愛い」と小さな「ン」がつく事わかるそうなの

娘・チチヤス

父の晩酌に「チチヤス」して乾杯するからついたあだ名

「表情筋を持たない猫達は体全体を使って苦笑いをする」

猫達は偶然というより必然と思えない出会いで飼い主の人生にかかわってきます

登場する猫達

- アメデオ チチヤスにトラウマを植え付けたネコ
- オヨフ ナジさんが飼ったネコ
- ホタ ヨワの子
- ピョーコ 乙さん達の女鳥のちにトラにやられる
- ペリーの母 黒茶のキジトラ
- オヨフ ナジさんが飼ったネコ
- ジロー かんろくのあるペリーの先輩
- オフレ このあたりを生きるホスネコ
- シロの子
- 白マル (白キ)
- 去勢されていない突然猫 (された猫は命令猫と呼ばれる)
- サン チャランポランのタンピラピョコをくれたとてい濃厚
- ユエコ その子ども 黒茶のトラマキちゃんネコ
- ウンボ 家を食べた恐竜
- カウ 団地のメリー「ペリーの兄弟」

やっぱり私は猫がうらやましくてしょうがないです

すでにいくつかポケットに入れて体験しているという

おしまい

乙さんは「人間はいつも丸ごとの人生の小さな模型を、どの模型を使えば私の人生はマシになるだろう」

猫の瞳にはきつと一番いい模型が見えているに違いない

私の飼い主は父という事になるのだろうか

母に捨てられ毎日飲んだくれてるあの人の距離のとり方が私は全くわからない

猫になれば、それがわかるのだろうか

ネコミミ草子

誰かに近づいてもトゲがささる前によけられる距離をとれるのだろうか

8月中旬に配付を開始しました「WB」vol.20の「草子ブックガイド早稲田文学編」(玉川重機さん作・画)のページにおいて、執筆者名が欠落しておりました。執筆者の玉川重機さんをはじめ関係者の方々、読者のみなさまにご迷惑をおかけしましたことを、深くお詫びいたしますとともに、謹んで訂正いたします。

だから言葉から逃れられない——そういうことを「地獄」と規定したんです。みずからを拘束するもの、ということ。

「地獄めぐり」というと、「苦しかった」とか「熱かった」とか「悲しかった」という感情と体験のほうに理解されることもあります。わたしがあの講演で言いたかったのはすごく初歩的でロマンティックであたりまえのこと、わたしたちが「言葉というもの」を使っていて、そういう世界に生きることに拘束されている、そういう自覚のことであって、それが「文学性」を保証していくものではないか、ということでした。言葉って残酷だし、ままたまらないもので、そのことがおのずと「自分がなににのっているのか」という反省をもたせる……それを「地獄」と表現したんです。

——「言葉の不自由さ」や「外部性」と呼んでもよいし、そう呼ばれてきたらどう思うことが、「地獄」という、誤解可能性も含めてイメージ豊かな言葉になったのはなぜですか？

川上 それを「寿ぎである」とか「天国を持っている」と表現するひともいると思いますし、どちらも同じ内容を示すのだと思います。わたしにとって「表現」は、自己を充足するものでなく、満たされたひともっとハイにするようなものでもなくて、悲しかったり苦しかったりするひとの悲しみや苦しみを半減していくものを目的としています。そしてそれが成就するとすれば、そのときに書き手の生が肯定される可能性がある……。もっと言えば、それだけが書き手の生を肯定するのではないかと、そう思うわけです。その肯定をめぐる物語にどうして「地獄」という言い方がでてるのかと言えば、その根本には、世界に対する印象に、わたしがポジティブなものを持たないところがあるのだと思います。「言葉を使わなければならなかった」「生まれてきた」という初期設定を、美しいし素晴らしい側面も多々あるしそれを享受してはいるけれど、しかし常に「悲しい」という気持ちが必ず上まわります。

——「語る」行為は世界に名前を与えることでもありますよね。赤子への名づけこそが、誕生を祝福し、意味づけるものだという考え方に象徴されるように。そういう捉え方と川上さんの考え方の違いはどこに？

川上 世の中にはいたるところポジティブなことが溢れていて、生まれてきてよかったし、あなたに会えてよかったし、それがメジャーで動いているわけですよ。それもよくわかるし、そういうものが文学的ではないという気持ちもあります。喜びを与えること、ひとを幸せにすることが文学であるというのも、まったくそうだと思います。でも、それだけのものはあまりわたしには関係がない。わたしがこれまで触れてきて本当に「文学の力」みたいなのを体感したのは、悲しみや苦しみを半減されたときのみで、つまり何らかの救済が存在したときだけで、だからわたしは表現をそういうものだと無根拠に思っているところがあるんです。誤解がないように言えば、喜びだけを延々描いても、人を救済する力があればそれはわたしにとって文学だと思います。主題ももちろん関係してくるけれど、それだけの問題ではないんです。

——半減してくれた作品というのは、具体的にどんなものでしたか？

川上 戦いの痕跡が残っているものはすべて。好みも価値も美学の問題だけど、わたしは生きることはどうやら戦いだと思ってるところがあるんです。権利をめぐって誰かと戦うとかそういうことじゃないですよ。なにと戦ってるのかわからない戦いですね。あるいは言葉との戦いかもしれないですね。だからこれは、なんとというか、はじめから負ける戦い、負けがわかっている戦いだと思う。むかし、埴谷雄高の書いていることが本当によくわかった時期があったんです、20歳くらいのとき。文学的にあの小説がどんな意味を持つかはわからなかったけれど、彼の戦いの痕跡、彼がなにと戦って、なにに負け続けてこうなっているのかというのが本当によくわかった気がしました。ニーチェのこともそうです。そういうひとがかつていて、これからも出てくるだろうし、いまもやはりいる。わたしは無数にある文学性のなかで、そういうものこそが自分にとって必要なものであると思うし、そういうものにしか反応できないし、自分もそれをやっていくしかない。「好き嫌い」って言われればそれまでなんだけれど、一部のひとたちにとっては、言葉の拘束を乗り越えようとして乗り越えられないけれども乗り越えようとする……という行為こそ

が大きな肯定に繋がる気がします。本を読んだり書いたりすることはなにも拘束はしてくれないんだけど、その可能性はじゅうぶんに秘めている、とわたしは思うんです。なかでも小説には、哲学とか批評にはない茫漠とした振れ幅があるから、歴史は短いだけれどやはりわたしの望むものを実現できるかもしれない可能性があると思っています。

ただ、悲しみとか地獄と言うと、特定の体験のイメージに繋がっちゃうんですね。「地獄を描く」と言ったら主題だと思いがちだけど、どんなにハッピーなものを書いても、そこには常に地獄が内在されている。あの講演のあとに東浩紀さんとぼったり会って、文学が地獄か救済かの話にほんの少しだけなりましたが、このふたつはわたしにとっては同じことなんです。『クオアンタム・ファミリーズ』は——これはわたしの感想ですけど、一回性にたいする、東さんの、それこそ拘泥というか……、主題にでもなく文体にでもなくプロットにでもなく、つまりあの世界には東さんにしか表出できない……この言葉を使うとまた誤解があるかもしれないけれど「地獄」があったでしょう？ 人類の悲しみと救済に届く感受性を持った——つまり今日の話の文脈で言うと、わたしが大切に思っている文学性に満ちた素晴らしい小説だと思いました。

救済の話にもどると、なにからの救済なのかと言えば、やはりそれは拘束されたりままたまらない、寿ぎとは別のところにいることからの、ですよ。そのとき、自然を見て救済されることもある。向こうはなんのメッセージを発してなくても、救済は訪れることがあるわけです。自分がどんなつもりで書いても、受け取ってくれないひとは受け取ってくれないし、自然を見てそこからなにかもを受け取るひともいる。だから言葉は無力だし、常に過剰なんだけれど、ただわたしの理念に近いものとして、拘束を解くにはものすごく幸せなひとが書くものを読むよりも、それと戦って這いずりまわっているひとの話を知りたい。そういうひとにしか見えないことがあると思う。幸せなひとにしかわからないこともあると思うけど、わたしには、わたしの体験がそういうもの以外のものを要請しないんです。講演の質疑応答で、最後は「書くことは祈りのようなものだ」って、古今東西のひとたちがいっぱい言ってきたことを言ったけれど、それに尽きてしまうんですね。もちろん、ときどきは世界がうつくしく発光するときもあります。でもそれは「生まれてきてよかった」ってことにはなぜかならない。「楽しいな、仲間がいてうれしいな」とかはあってもそれは分子の話であって、分母はもう真っ黒という、まあ単にわたしの性格の話になってしまうのだけ(笑)。

そんなふうには、書くことはどこまでも個人的なことだけれど、書くことの動機はなにかのひつつには「安住を揺さぶりたい」気持ちもあります。いろんな目的のひつつとして、基本的に自分で戦わずして得たものに安住しつつけるものに対する嫌悪感もある。規模はさておき、わたしはわたしでわたしなりの革命を夢見しているところがあって、自分でできる範囲での革命と救済をやり遂げたいという思いがあるんです。これはまあ、みんなそうだろうけれど。「もういま満たされていますよ」「誰の話も聞かなくてもわたしたちは充足しています」「ゆるゆると書き綴ってゆきたい」というひとたちは、なんていうか、すごく素晴らしく恵まれたひとだなあと思うし、あんまり文学とか関係ないだろうなと思う。げんに文学じゃない小説がたくさんあってそっちがたくさん読まれているし。だから「文学性」がいまはもうあまり必要とされなくなっているのは皆さんご存じのとおりで。そもそも「文学性」なんてものが一般的に偉いわけでもなんでもなくて、たんにわたしが好きで個人的に必要としているってだけの話です。わたしのまわり、仕事以外の友人なんて1冊も本読まないもの。けっこうみんな、満たされてるのかな。どうなのかな。満たされてるならそれはいいことだと思うけれど。ゲームでもアニメでも映画でも絵画でもなんでもいいですよ。純文学でもエンタメでも短歌でも何でも。そこにわたしにとって切実だと思える戦いの痕跡さえあれば。そしてそれを必要としているかもしれないひとに、わたしはなにがあっても届けようと思っています。わたしの場合は詩と小説と音楽ですね。つくって、届ける。これを一生をかけてやっていきます。というか、講演でも最初に申し上げたとおり、今日もとても抽象的で、とてもロマンティックな話になりましたね。よかったです(笑)。

川上未映子
玉川重機
新城カズマ
望月旬々
米光一成 + ナカシマカズユキ
モブ・ノリオ
斎藤美奈子
nanakikae
牧田真有子
蓮實重彦

¥0

川上未映子

なぜ我々の読書は こんなにも素晴らしいのか

—2010年5月29日、早稲田大学文化構想学部で行われた川上さんの講演会は、定員400人の会場の通路や壇上までお客さんで埋まり、それでも100人以上のひとが入れずに（中には関西からいらした方までいたのに）行われました。入れなかった方々に申し訳なく思うとともに、そのひとたちも含めたみなさんに少しでも当日の熱気をお届けしたく、当日話されたことを振り返ったインタビューをお願いしました。

川上 オピニオンめいたことは全部小説のなかに入れることができるのがいちばん理想だし、講演は勢田さんも込みでの受け渡し感のようなものがあるから、あらためてインタビューで喋ることとはちょっとしたズレがあると思うんですが、ともあれ5月の講演にはたくさんの方が来てくださって、ありがとうございました。講演は「なぜ我々の読書はこんなにも素晴らしいのか」というタイトルだったんですが、で、ひとくちに読書とか文学といってもいろんな角度があるけれど、本を読むということがいったいわたしたちの人生のどこにダイレクトに響いているのか、という話をしたかったんです。

ひとが「文学」というときの文学性みたいなものって、小説のなかだけでなくあるものじゃなく、たとえば詩にもあるだろうし、音楽のなかにもある。そういう「文学性」という、ロマンティックでひじょうに抽象的な話をします、というところから始めたんですね。ひらたく言うと「小

説」は言葉で書かれていて、その「言葉」はひとつの意味を規定しながら無数にひらかれていくという性質を持っている。じゃあその文学性とはなにか。あまりにも文学的に親和性が高かったからあときは「地獄」という言葉を使ったんですが、文学というのは、猫が日だまりで寝転ぶ話でも、お祖母ちゃんの思い出を書いても、すべて地獄めぐりのバラエティである、ということをはじめに申し上げました。このとき「地獄」がなにを指しているのかというと、「～があつて苦しかった」とか「悲しかった」ということでもいいし、喜びでもいいんですが、だけど、そういうものを表出して他者に伝えたり自分が認識するとき、まず絶対にわたしたちを拘束するものとして、「言葉」があつてしまう。つまり主題に先立つ「言葉の機能」が地獄であると、そう言いたかったわけです。ひとつの意味を指し示そうとしながら、それが指し示すものからいちばん隔たれてあると言ってもいいのが言葉であつて、しかも言葉のそのありかた以外のありかた、言葉以外の思考の方法というものを、わたしたちはまだ知らない。体験とかいろんなものがどこから立ち上がってくるのか、それは言葉以前のものなのか言葉なのか、ということ自体が言えないポイントである、そんなふうになつてわたしたちは言葉を使つていて、